ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.104

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

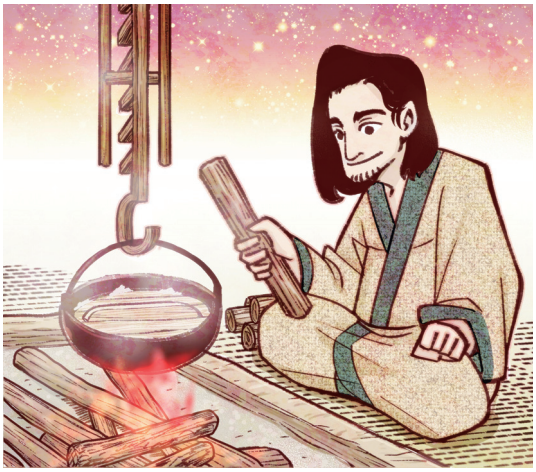
チクニ(焚き木、薪)

村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)

「家」を建てるなら暖炉のある家」と、火のある、火の見える暮らしに憧れていました。暖をとりながら燃え立つ炎、薪がパチパチと爆ぜる音、どこか懐かしい木の燃える匂い、火があるってだけで心地良さが伝わってきますよね。しかしながら、高齢化が進む我が家が優先すべきは「火の用心」ということで、数年前に建てた新居は、火のある暮らしとはほど遠い、オール電化。う〜ん、夢と現実とのギャップが…。

アイヌにとって火は位の高いカムイ(神)であることから、炉の火は絶やすことが無かったといいます。暖をとり、炊事をし、照明とするなど暮らしに欠くことのできない火。その火の燃料となる薪は、アイヌ語でチクニやカイクマなどと呼ばれます。幌別に伝わる薪を伐る歌に　♪私が木をきるのは　私の火の神を養うためなのですよ♪　薪は火のカムイの食事、火のカムイは木を食べて生きるって考え方、面白いですよね。そんな、火のカムイの食糧となる薪ですので、汚れた木や腐った木を燃やすなんてもっての外だといいます。

基本的に針葉樹も広葉樹も、しっかり乾燥させれば薪として使用することはできるといいます。マツなどの針葉樹は、火付きが良いので焚付けなどに良く、高温で燃えるのですが直ぐに燃え尽き、煤やタールが出やすい、ナラなどの広葉樹は、火の付きは悪いんですが火持ちが良く、煤が出にくいなど、それぞれの木の特徴にあわせ使い分けられました。中でも生木でも良く燃えるハルニレやヤチダモ、アオダモ、イタヤカエデ、ハンノキなどは特に重宝されたといいます。また、様似では、イヌエンジュは家のカムイのイナウ(木幣)をつくる大切な木なので決して薪にしないとか、幌別では、エゾヤマザクラはイナウケマ(木幣・足)にする木なので、薪にすると腰が曲がるとか、鵡川ではミズナラの三つ又の木は、山のカムイの木として尊ばれ切って薪にすることは無かったといい、白老ではドロノキを焚くと病気のカムイが集まって来るから焚かないなど、地域によって薪にしてはいけないという木もあります。



イラスト／荘田悠人

薪が線香花火のように小さく爆ぜて火花が散ることを、アペミナ(火・笑う)といって、火のカムイが上機嫌の時だと表現されます。カムイの加護のもと、火と共に育てられる子供たちが最初に教えられるのは火を大切にすることだったといいます。

J

次回のテーマは「シ゛ッシモイェ(地震)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
北海道白老町にOPEN

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■荘田悠人(しょうだゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。